

第1章…騎士の帰還

暗闇の中を手探りで進んでいた。ただ……懐かしい光を求めて。

「光が見える」

淡い光に近づいて、ぼんやりと開いた目に映ったのは、見慣れたはずの自宅
寝室の天井だった。木で出来た素朴な天井、木目までハッキリと覚えている。

わたし、死んだ？

ほんの直前まで肩で息をしながら、血と泥にまみれた剣を杖代わりにして、戦場にへたり込んでいた。その記憶が、鮮明な悪夢のように脳裏を駆け巡る。

敵將軍の憎たらしい顔。勝ち誇ったあの表情が、脳裏に焼き付いてる。

血と硝煙の匂い、仲間の断末魔、そして、最後に見たあの人の悲しげな横顔。私は、帝国騎士団の騎士だった。劣勢を極める前線の部隊が、敵の奇襲を受け、命を落としたはずなのだ。それがどういうわけか、自分の部屋に戻っており、ぼんやりと天井を見ている。そして突然、電気走ったように覚醒した。

「ラディル師範！」

バツと飛び起きるが、やはり夢ではないようだ。そこは私が住んでいた部屋。するとそこに、一緒に暮らしている友達のミンデイが、慌てて飛び込んで来る。

「どうしたの！」

「ミンデイ！」

「そうよ、ミンデイよ！」

生き別れになったミンデイが、私を抱きしめた。

「うわああああん」

「ちよ、ちよっとちよっと」

そして私が落ち着くまで、ミンディは抱きしめてくれていた。私が泣き止むと、ミンディは私に言う。

「怖い夢でもみたのかな？」

「夢……？」

「そうよ。あなた、今日から道場に行くんでしょう」

「道場？ いま、いつ？」

「なーに言ってるの」

そして聞いた年号は、なんと私が戦った時より五年ほどさかのぼっていた。ミンディは普通にご飯を用意していて、私はいつもの日常に戻ったのだ……。さつきまで死ぬか生きるかの戦いをしていたのに、どういう事だろう？

そして、ご飯を食べた私は服を着替えて家を出る。

「じゃ！ 行ってらっしゃい！ 騎士さん！」

「ミンディありがとう」

街の雑踏も戦争ムードなどひとかけらもない、平和そのものの光景が広がる。

夢？

いや違う。そんな生ぬるいものではない。私は確かに……死んだ。

私は騎士になるために、初めて道場を訪れたあの日へと辿り着いたのである。

「やあ！　おはよう！」

「お、おはようございます」

隣人が声をかけていく。この空気も肌感覚も、絶対に夢ではない事が分かる。

これが夢じゃないのであれば……もう一度やり直せるならば運命を変えたい。
今度こそ私は、あの悲劇を繰り返さない。思わず握りしめた拳に力がこもる。
あの日から、私は、ただ好きな人の下で、ひたすら戦いの訓練をし続けていた。
だけど、大切なものを守る力はなかった。多くの仲間を失い、そして彼までも。

「何をしている？」

懐かしい声が頭上から降ってきた。ゆっくりと顔を上げると、そこに立っていたのは、以前と寸分違わぬ姿のラディル師範だった。銀の髪と顎に無精ひげ、長いまつ毛に縁どられた美しい瞳。薄い唇がわずかに弧を描いて笑っている。

ポカンとしている私に言う。

「君は今日からだったな」

神が作り上げたかのような端正な顔立ちに、百九十はあろうかという長身、そして鍛え上げられたしなやかな肉体。私が、ひそかに想いを寄せていた人。

剣の師であり、心の支えだった人。

「ラ、ラディル師範……」

声が震える。まさか、こんなにも早く再会できるとは。あの記憶がある私は、この人がどれほど強く、そしてどれほど優しいかを知っている。

私を庇って、死んだ人。

ラディル師範は私を見下ろし、ふわりと微笑んだ。その笑顔は、最後に見た悲しみに染まった顔とは違い、まるで天使のようだった。

「随分と疲れているようだが、大丈夫か？ 今日が初めての道場だと聞いたが」
「はい、大丈夫です！ よろしくお願いします！」

立ち上がろうとするが、足がもつれる。再会による動揺が私を襲っていた。

「無理は禁物だぞ」

「無理ではありません！ よろしくお願いします！」

「凄い気合いだな！ よし、入れ！」

そう言って、ラディル師範が優しく手を差し伸べてくれた。その温かい手に触れた瞬間、記憶が津波のように押し寄せる。彼はいつも私を気遣ってくれた。強くなりたいと焦る私を、いつも陰ながら支え、見守ってくれていた人だ。

私は涙を見られぬように、サッと振り向き道場に入っていく。するとラディル師範も一緒について来てくれた。

中には他の弟子たちが揃っている。それを見て、私はもう我慢できなかった。ポロポロと涙を流し、その場にへたり込んだ。

「おいおい、大丈夫か？ 怖いのか？」

「い、いえ！ 嬉しくて！」

道場に居たのは、死んでいった仲間達だ。ラディル師範に道着を渡されて、私は着替えのために控室に行く。

「みんな……今度は絶対守るから」

そして涙を拭きながら服を脱ぎ始めるが、鏡の自分の体を見て愕然とする。

「えっ……ほそい」

あれだけ鍛えた筋肉が、何処にもなかった。

本当に最初のころ……。

私は最初、あまり乗り気じゃなかった。だけど、私のような不器用な女が、この世界で生きていくにはこれしかないと思った。だけど、今の志は全く違う。私はラディル師範を、そして優しかった仲間達を、悲劇から守ると決めている。

そのためには、着実に力をつけ、強くなる必要があった。

「よろしくお願いします！」

そして、私は素振りから始める為に、道場の端に行って構えをとってみる。
すると、ラディル師範が私に近づいて来た。

「ん？ その構え、初めてじゃないな？」

「いえ！ 本日が初めてであります！」

「ど、どうしたどうした。その口調」

「あ……」

戦場ではラデイル師範が団長で、私は副官だった。その癖が抜けない。

「いえ。初めてです」

「そうか……、剣を振ってみろ」

「は！」

ピュン！ 剣を振るってみるが、筋力が付いていかない。勢いあまった剣は、そのまま道場の床を打ち付けた。手にジンと衝撃が走るが、それでも我慢した。

「ほう。筋が良い……、だが体がついて行かないようだ」

「すみません」

「いやいや。君は才能がありそうだ。太刀筋が良いぞ」

「ありがとうございます！」

最初は、もっともたついていた。だけど死ぬほど、百万回も振った剣である。振り方くらいは、忘れてはいなかった。

「よし！ みんな！ つづけろ！」

皆で剣を振り続け、そして今日の稽古は終わった。

「お疲れ様でした！」

私は、道場に深々と頭を下げる。体は鉛のように重い。昔の記憶では軽々と

こなしていた動きの一つひとつが、今はとてもきつかった。やはり身体は五年前のまま。鍛え直すしかない。それでも、私の心だけは確かに前に進んでいた。

「みんな……死んでほしくない。必ず守る」

仲間たちの笑顔。彼らの声。もういないはずの人々が、今この場所に確かに存在している。私は過去を悔いるだけの女じゃない。今度こそ、未来を変える。

「おい、君……ずっと泣きそうな顔してるけど、大丈夫か？」

声をかけてきたのは、かつて最前線で共に戦い、最後は敵の刃に倒れた仲間。女剣士のユーリだった。面倒見が良くて、気づけば私の盾になってくれた彼女。

今はまだ、私のことを、ただの新入りだと思っている。

「うん、大丈夫。ちょっと疲れただけ」

「無理しないことね。しょっぱなから飛ばして潰れる新人はいっぱいいるのよ」

彼女が笑いながら言い、その笑顔に安堵した。そして心の中で、静かに誓う。

ユーリ……あなたも、絶対に死なせない。

控室で汗を拭いていると、ラディル師範の姿が見えた。彼は弟子たちが帰っていくのを見送りながら、どこか私を観察しているような眼差しを向けてきた。

「今日の稽古、辛かったか？」

「……正直、はい。でも、もう知っています。簡単な道じゃないことも」

「君は、目が鋭いな。まるで戦場を知ってるような……そんな目をしている」

一瞬、息が止まった。けれど、私は微笑んでごまかした。

「気のせいです、きっと」

「そうかもな。でも焦るなよ。強さってのは、戦うためにあるだけじゃない」

「……知ってます。守るために、ですよね」

私のその言葉に、ラディル師範の目が僅かに細まった。ほんのわずかだけど、

まるで何かを懐かしむように、優しく、柔らかく笑った。

「よく、知ってるな」

私はうなずき、心の中で呟いた。師範は、熱を含んだような瞳で笑う。

……あなたの言葉は、全て覚えてます。

するとユーリが、私の前に来て言った。

「さ。今日は初の練習だったし、ご飯ご馳走してあげるよ」

「えっ。悪いよ」

「いいからいいから！」

だがそれを聞いたラデイル師範は、ユーリに言った。

「それじゃあ、俺が二人にご馳走しよう。友情を深める為にもいいだろ」

「やった！」

「なんだユーリ、それを狙ってたのか？」

「ばれたか」

「ふふっ。行くぞ」

二人に連れられて、街へ繰り出す事になった。夕暮れに包まれ始めた街角、陽が傾き、石畳の通りを橙色に染めていた。人々の笑い声や馬車の音、食堂の

香ばしい香り……それらすべてが、かつての日常そのままだった。

まだ、誰もあんなことになるなんて思っていない、ただの日常がある。

そして私達は、道場からほど近い木造の小さな食堂に入る。その店内は素朴で、昔と何も変わらない。道場に通い詰めたときに、しよつちゅう来ていた店。

「うまいぞ、ここの焼き肉団子。昔っから食べてる」

ラディル師範がそう言って、店の主人に指を立てた。

「三つ、頼む」

「ラディル師範って、結構食いしん坊なんだよね」

ユーリが笑う。

「そうか？」

師範はそう返したが、その表情は穏やか。私は、ただ黙って二人を見ていた。この空気が、懐かしい。ラディル師範の仕草、ユーリの無邪気な笑い声。全部が愛おしい。

「…肉団子、楽しみです」

そう言うと、ラデイル師範がふとこちらを見た。

「君、稽古のときと顔が違うな」

「え？」

「稽古のときは、まるで戦場に立ったような目をしてた。今は、年相応の顔だ」
「そ、そうでしょうか……？」

視線を逸らした。心が、少しだけ跳ねた。

「いいことだ。道場に来る者のすべてが、闘うために生きてるわけじゃない」

「……私は、守りたい人がいるから強くなりたいんです」

気づけば、そう口にしていた。ラディル師範は少し驚いたように眉を上げ、そして優しく笑った。

「いい目標だ。そうだ、君が守りたい人を守れ。その気持ち、絶対に忘れるな」

その言葉が、胸に深く響いた。地獄のような戦場で、何度も守ってもらった。その手の温かさを、私はまだ覚えている。

ラディル師範……。

その時、料理が届いた。こんがり焼かれた肉団子に、香辛料の香りが漂う。

「きたーっ！ 師範、いただきます！」

「ったく、礼儀を忘れるな」

ユーリが、はしやぎながら食べ始める。その様子に、自然と笑みがこぼれた。私は黙って、目の前の団子に手を伸ばす。ふと視線を上げると、ラディル師範と目が合った。一瞬だけ、時間が止まったような感覚。

「いただきます」

彼の視線は真っ直ぐで、どこか懐かしさを帯びていた。まるで、心の奥を見透かすような、静かで強い眼差し。

「……うまいぞ」

その言葉にハツとして、私は顔を赤らめた。

「は、はいっ」

そして、そっと口に入れたその味は、涙が出るほど懐かしかった。だけど、今泣くわけにはいかない。私は、過去をやり直すために戻ってきたのだから。

今度こそ、この人たちを守ると誓ったのだから。

第2章 山岳訓練

入所から数週間が過ぎた。筋肉痛と闘いながら、毎日を修行に捧げている。かつて自分が編み出した技を、まるで初めて覚えたように習いつづける日々。再び基礎から積み上げていくのは苦しかったが、心だけは折れなかった。

ラディル師範の目は、いつも温かい。

「あいつ、飲み込みが早いな」

「まるで、前にもやってたみたいな動きするんだよなー」

仲間たちのささやきが聞こえる。私の記憶には確かに生々しい戦場があった。

だからこそ、彼らを導くことができるが、それほど時間があるわけじゃない。帝国の前線崩壊と、あの奇襲。それは、あと五年後に確実に起きる。

そしてある日。

道場に、見慣れない来客が来る。だが私だけは、知っている人達が現れた。軍服を着た男。ラディル師範と話していたその男の言葉が、私の心を凍らせる。

「西の山脈で魔獣の群れが動いたらしい。封印が緩んでる可能性がある」

来た。

それは、かつての崩壊の端緒。私の知る歴史が、また動き出した証拠だった。同じ歴史を辿ってはいけないと思った私は、ラデイル師範に助言を試みた。

「あの！ 師範！」

「なんだ」

「山岳地帯での戦闘訓練で、心身を鍛えるというのはどうでしょうか！」

「山岳地帯の戦闘訓練か……」

「ぜひ、やりましょう！」

そう。道場では、山岳地帯での訓練など一度も無かった。結局道場での訓練、それしかないまま駆り出され、不慣れなまま実戦に出た記憶がある。

だからこそ私は、もうこの段階からやるように助言したのである。

ラディル師範は少し考えていたが、その事をみんなに伝える。

「山で実戦訓練を兼ねた修行をしようと思うが、やってみたいものはいるか？」

すると私とユーリ、それ以外にも数人が手を上げて、いつしか全員が加わる。

「よし。だが、山を舐めちゃいけない。近場とはいえ、魔獣が出るからな」

「実戦訓練も兼ねて、討伐してもいいのでは？」

「まあ、お前達も力はあるからな、ゴブリンぐらいならどうにかなるか」

「ありがとうございます！」

それから数日後、準備を終えた私達は山に入っていた。本来ならば、冒険者ギルドで行われる訓練だが、騎士の道場がやつてはいけないという道理はない。

「そっちに行ったぞ！」

「仕留めろ！」

山での実践訓練をしていると、大型魔獣であるビッグボアが現れたりした。それをラディル師範の指示の下、連携して討伐し肉にありつけることも。

「よっしゃ！　今日は焼肉だ！」

「お前達！　よくやった！」

「はい！」

山の空気は冷たいが、澄んでいて気持ちがいい。訓練とはいえ、どこか遠足のような高揚感を持って、皆は望んでいた。恐らく生死を想定した訓練は、私だけが思っている事。

「少し空が怪しいな」

やはり山の天候は気まぐれだった。もうすぐ夕方になる時に急に霧が出始め、視界が奪われる。私は限界を超えて訓練していたため、膝がふるえていた。

「よし、そろそろ山を下りるぞ。今日、麓の宿に一泊して帰る」

それに、みんなが返事をした。そして私達が急斜面を下っていく。

うう……膝が笑う。焦って気合を入れすぎたせいだ。そして一つの岩を飛び越えたその時だった。足もとの石がぐらりと傾き、私は崖の方に落ちかけた。

「危ないっ！」

その瞬間、ラディル師範が私の手を掴み、引き寄せるように抱きとめた。だがその勢いを殺せずに、そのまま二人は足を滑らせて谷に落ちていく。

ザブーン！

幸いにも崖下は川で、怪我をせずに落ちた。

「すま、せん……！」

「気にするな。川でよかったな」

ラディル師範は、私を支えたまま、上で待っている皆に言った。

「お前達は先に下って宿に行け！ もたもたしていたら、日が暮れてしまう！」

霧の向こうからユーリが言う。

「ですが！ 二人は！」

「全隊を危険にさらすわけにはいかない！ それこそ訓練の意味がない！」

「助けます！」

「だめだ！ お前達は宿に急げ！ 日が暮れる前に！」

「わかりました！ 明日迎えに来ます！」

「頼んだぞ！ 気を付けて進め！」

「はい！」

そして二人は水から這い上がり、岸辺に腰を下ろす。

「夜に進むのは危険だな……。この霧じゃ無理だ。今日はここで一泊しよう」

そう言って、ラディル師範は私を連れて、小高くなった巨大な岩場の下、自然の庇のようになった場所に焚き火を起こした。彼の横顔を見つめながら、

私は胸の奥が痛くなるのを感じた。

「すみません。私のせいで」

「馬鹿いえ。これも、訓練の一環だ」

「はい……」

あの時の戦場でも、こんな風に助けてくれたあなたの顔が、焼きついている。
簡単な食事をとったあと、足元に火の粉が舞うのを見つめていた。

「師範」

「ん？」

「……お守りくださってありがとうございます」

ラデイルは少し笑って、静かに言った。

「君はずっと、誰かを守ろうとしてる目をしてる。たまには守られていいんだ」

言葉が胸に突き刺さった。私は、彼を守りたいと願っていたから。

「……ラデイル師範」

「なんだ」

焚き火の橙に照らされた彼の横顔に向かい、心の底から出た言葉を漏らした。

「好きです」

静寂が流れた。焚き火の音だけが、はぜるように響いていた。ラディル師範は少し驚いた顔をした後、ふ、と息を漏らすように笑った。

「君とじゃ……年が違いすぎるだろ」

「年齢なんて関係ありません。私は、あなたをずっとお慕い申ししておりました」

私は黙ってうつむいた。言えない。あなたが私を庇って死んだ未来なんて。

「俺もずっと君のことを見ていたよ。最初に道場に來た日、目を真っ赤にしな
がら、拳を握っていた姿。あの日から、何かに惹かれていたのかもしれない」

ラデイル師範の声は低く、優しく、それでいてどこか切なげだった。

「師範……」

私は無意識に、彼に近づいていた。彼の手には、自分の手を重ねる。するとラデイル師範は、そつとその手を握り返してきた。

「寒いかな？」

「少し、だけ……」

彼は自分のマントを外し、私の肩にそつとかけた。そしてそのまま、隣に腰

を寄せ、私の背中に腕をまわす。火の温かさとは違う熱が、体を包む。

霧に包まれた静寂の中、彼の心音が、私の背にゆっくりと伝わってくる。

「師範」

「ん？」

「私は、師範にずっとついて行きます。だから、死なないで」

いつしか、私の目からは涙がポロポロと流れていた。

「そう簡単にくたばるつもりはないさ」

「私を守りますから！」

「君が……俺をか？」

「はい！」

「……」

少し冷えてきたようだ。そこで彼は私に体を寄せて来る。

「俺も、君を守ると誓おう」

私が泣きながら、ラディル師範を見つめる。そして思わず、私の方から師範に唇を重ねてしまった。唇が触れ合った瞬間、世界が静かになった気がした。

ラディル師範は驚いたように目を開いていたが、次第にその瞳が柔らかく細められていく。そして今度は彼の方から、もう一度唇を重ねてきた。

焚き火の灯が揺れる。風の音も、水のせせらぎも、遠くに溶けていく。

彼の手が、私の背を優しく包み、額を寄せて囁いた。

「君とこうしていることが、信じられない」

「私もです。だけど……夢じゃありませんよね？」

「夢じゃないさ。……ぬくもりが、こんなに近いんだから」

それから、時間がゆっくりと流れていった。抱きしめ合うだけで、心の奥が震える。肩に回された腕の力強さも、交わす言葉の少なさも切なく感じた。

焚火の炎がパチパチと音を立て、二人だけの世界に優しい音楽のように響く。

「ずいぶん濡れてしまったな。少しは乾いたか？」

「まだ濡れてます」

「俺もだ。このままだと寒いから、むしろ脱いで乾かした方がいいかもしれん」

ラディル師範の声が、静寂の中でやけに大きく響いた。二人だけの空間と、裾からしたたる水滴。濡れた服を手早く脱ぎながら、ふと彼の視線に気づいた。

「君の肩も太腿も、だいぶ鍛えられてきたな。訓練をしている証拠だ」

それは賛辞とも、欲ともとれる声。彼の手が、濡れた髪をそっとかき上げ、鎖骨に指が触れる。指先が首筋、胸元へとゆつくりと滑り降りていった。

「……体が、熱いな」

「……緊張してます」

「これは、緊張の熱じゃないだろ？」

その囁きと共に、ラディル師範の唇が、私の鎖骨をそっとなぞる。それが、水気を吸い上げるたび、肌の奥からびりびりと何かが上がってくるようだった。そして唇が、胸の上まで降りてくる。ラディル師範の手が湿った肌着の上から、そっと胸のふくらみに触れる。

「……師範」

「いやなら止めるぞ」

「いやなんかじゃありません」

指先が乳房のふちをなぞり、布越しに先端をきゅつとつままれると、思わず私は声を上げてしまった。

「あ……っ♡」

「君のここ、敏感なんだな」

「始めてなんです」

そう。本当はずっとあなたに捧げたかった。死ぬまえに一度だけでもいい、抱いてもらいたかった。それが今、叶うと思えば思わず大胆にもなる。

くりゅ♡

乳首を指で転がされるだけで、びくびくとなってしまふ。

焚火に照らされ、二人はオレンジ色に染まった。体が乾いた事で、寒くない。敷いた布の上で、私はゆっくりと横たえられた。ずっと夢見ていた。愛する人との逢瀬、歳の差なんかどうでもいい。私はこの人に全てを捧げたかった。

「君を始めてみた時から、不思議な感じがしたんだ」

「どんな感じですか？」

「なぜか、ずっと運命を共にするのではと思ったんだ」

その通り。私は騎士団長になった師範について、副団長を任される事になる。二人はそれから死線を潜り抜け、最後には私を守り師範が殺されてしまふ。

「君の体は本当に敏感なんだな」

「はい」

でも多分、半分正解。

愛する人から触れられているから、感じてるんだ。そしてまた、二人の唇が重なった。熱い熱い思いが混みあげ、私は貪るように師範の唇を求めた。

「可愛らしいな」

「うん。ずっと離さないでください」

「分った……離さない」

そして彼の指が、するりと下へ降りていく。体をなぞる指に肌を粟立てさせ、私は師範にしがみついた。指は濡れた下着の上から、そつと秘所をなぞった。私はびくと腰を揺らす。

「あ……っ、そこ……!!」

「すまん。だが、これ以上はもう我慢できそうにない」

ラディル師範の指が下着をずらし、指先が濡れそぼった割れ目を撫でる。夜の静寂に、水音とは異なる、ぬるりとした音が混ざった。

ピチャ♡ くちゅう♡ くちや♡♡